

和服における着崩れについての考察（第3報）

仲村洋子，羽生京子

The Study on deformation of dressing in KIMONO Part 3

Youko NAKAMURA and Kyoko HABU

和服着装時における着崩れの一つの要因として、長着の仕立て上がり寸法と着用者の体格・体型の不一致に着目し、究明しているのが本研究である。

腰囲100cmを超える体格つまりJIS規格分類によるLサイズについては、身体に合わせて寸法を算出する割り出し法の適用が妥当であることと、着崩れについても有効であることを確認した。

これまでの実験においては、「ゆかた」を対象としていたので下着として肌襦袢・裾除けのみで着装させた。普通、長着を着用する際には、ゆかたを除いて肌襦袢・裾除けの上に更に長襦袢を用いるのが一般的である。着用する理由の一つとして、和装スタイルの土台を整えその効果により着崩れを緩和することがある。そこで、今回は一歩進めて長襦袢を着用することで、どのような影響があるのかを探ることにした。

今回の被験者は、標準寸法の範囲内操作では対処が不可能であったLサイズに絞り、試着衣の長着は従来通り標準寸法と割り出し寸法の2着を作製した。加えて、それぞれの長着寸法に対応させた長襦袢をウール地・絹地の2種類の素材で作製した。

なお、割り出し法における長着については、半身の幅寸法の配分について前報の課題を考慮し予備実験を試みた上で脇線位置が2cm後方になるように操作した寸法を採用した。

結果として、長襦袢を重ねたことによる着崩れ量としては想定したより少量であったこと、そのこと以上に着装した姿に影響を及ぼすこと、つまり、長襦袢の抱幅によって長襦袢の衿合わせ、ひいては長着の衿の形状が決まることを把握した。

キーワード：着崩れ、標準寸法、割り出し法、試着衣、長襦袢

I 緒 言

花嫁衣装の打掛け姿のように纏う着方は別として、一般的に「着物」「キモノ」「きもの」と称される和服の一種類である長着は、数本の紐、伊達巻、帯等を用いて形を整える。この

姿・形が動きに伴って変容することが着崩れであり、その量、要因について探っているのが本研究である。着崩れの一要因として、長着の仕立て上がり寸法と着用者の体格・体型の不一致に着目した。

JIS規格の分類によるS・MおよびLサイズの被験者に対して、各々2種の試着衣、すなわち標準寸法と割り出し法による寸法の長着を製作し、着装実験を試みたのが前報¹⁾である。

結果として、標準寸法の範囲内で対応し得るS・Mサイズと異なり、腰囲100cmを超えるLサイズについては、標準寸法では身幅不足により顕著に着崩れ状態を呈した。それに対して、身体に合わせた割り出し法では、着崩れ量が減少してS・Mサイズと似通った程度にとどまった。つまり割り出し法の有効性を確認できた。

ただ、これまでも再三触れてきたように、割り出し法の有効性は実証できたとはいえ再考すべき課題が残されている。例えば、デザイン的な意味をもつ脇線位置に影響する身幅の配分比率もその一つである。今回はその点に関しても考慮しつつ実験をすすめた。

これまでの実験においてはゆかた地を用いて長着を作製したこともあって、下着として肌襦袢と裾除けのみを着用して行った。しかし、長着を着用する際には「ゆかた」をのぞいて、肌襦袢と長着の間に長襦袢を着用するのが通常である。長襦袢の着用理由として、上に着る長着に対して防汚といった実用面、上着の袖口、振りから見え隠れするわずかな量ではあるが、上着と長襦袢との配色の効果を考慮に入れるおしゃれ要素、そしてなにより下着として体型をととのえて着崩れを緩和する役目等が考えられる。

そこで、今回は着装実験を一步すすめて着装する過程に長襦袢を加味することで、着崩れにどのような影響を与えるのかを探ることにした。

前報でも記述したが、S・Mサイズについては着崩れに関しても、標準寸法の範囲内での操作により対応可能が判明したこともあり、今回はLサイズ以上にしぼって実験することにした。被験者は本学服飾造形学科4年次の学生に協力を得た。

Lサイズについては標準寸法内での数値の操作だけでは対応不足であることはすでに実証されているので不要とも考えたが、今回は長襦袢をプラスした新条件での取り組みでもあり、確認する意味と割り出し法での着崩れ状態との対比をするために再度採用した。

II 着装実験

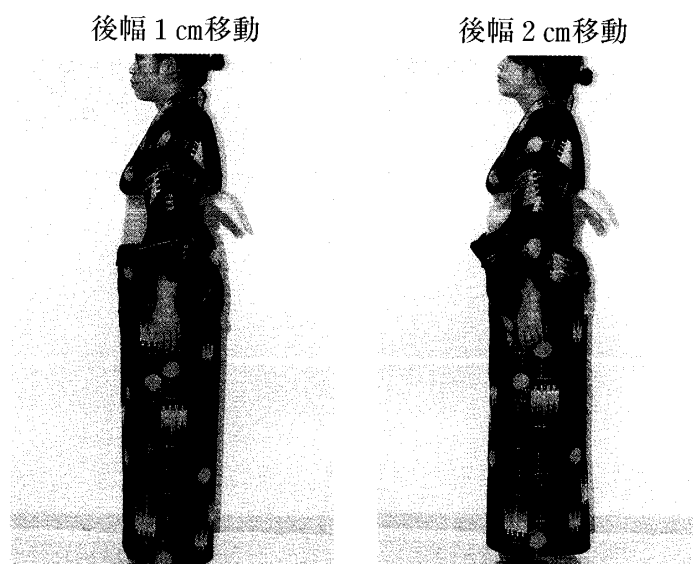
1 被験者と仕立て上がり寸法

着装・着崩れ共に解決しなければならない問題を多く抱えているのは、標準寸法では包括出来ない肥満体型である。今回被験者とした学生は、身長161cm、腰囲104cmであり、これは

第1表 採寸部位と被験者の寸法

(単位：cm)

| | 採寸部位 | 寸法 | | 採寸部位 | 寸法 |
|---|--------------------|------|---|-----------|------|
| イ | 身長 | 161. | ト | 腰囲 | 104. |
| ロ | 尖椎より床まで | 136. | チ | 掌囲 | 20.5 |
| ハ | 肩中央から乳まで | 30. | リ | 腕付根囲 | 45.5 |
| ニ | ウエストから肩を通過してウエストまで | 90.5 | ヌ | ウエストから床まで | 99. |
| ホ | 尖椎よりウエストまで-2. | 30. | ル | 胸囲 | 103. |
| ヘ | 首囲 | 37. | ヲ | 胴囲 | 81. |



第1図 左側面図

JIS規格のLサイズ以上に当たる。より正確な体型を把握するために計測した部位と寸法は第1表の通りである。

和服寸法の基本は長着である。今回の被験者用の試着衣を作製するにあたって、割り出し法の課題の一つを解決する必要に迫られた。つまり、身幅を割り出し法で算出し、そのままの数値で縫製すると、脇線が前方に寄り過ぎることである。形に変化の無い和服において布の接合線はデザイン線としての役目も果たす。そこで、割り出した半身の幅は確保しつつ、後幅・前幅・衿幅の各部位で配分する際に、後幅・前幅の数値を加減することにした。つまり、後幅を1cmと2cm狭くした2種類の試着衣で予備実験を試みた。第1図はその左側面の

写真である。

検討した結果、後幅2cm減、前幅2cm増とした寸法を適当であると判断した。

また、これまで尖椎から床までを計測し算出してきた衿寸法についても、計測方法の不正確さ等再考の必要を感じ、より簡単な方法として横山千年枝著『和服寸法百科』²⁾を参考にして身長から算出することを試みた。著者らが実測した寸法と大差なかったことも採用理由である。その他着装に直接関係ないであろうと考えられる寸法については、これまでと同じく標準寸法を利用した。

また、標準寸法については被験者の体型に関わらず前回と同様とした。ただし、着心地の関係から衿寸法は割り出し寸法を用い、身丈と衿下は被験者の身長を基準とした。

一方長襦袢については、それぞれの長着に対して対応した寸法での2種類を作製することとし、仕立て上がり寸法については我々がこれまで使用してきた裁縫書シリーズの一冊である、永野順子著『平面構成学実習Ⅱ』³⁾の「大裁女物ひとえ長じゅばん」「長着との比較」の項を参考にして決定した。ただ、対丈で着装する長襦袢の身丈については身長の84%とし、下衿幅は7.5cmに規定した。また加減範囲のある寸法については、Lサイズについての実験であるため広くなる数値を使用した。

長着と長襦袢についての割り出し法や加減の仕方と仕立て上がり寸法は第2表と第3表に示した。なお、標準寸法の長着は試着衣Ⅰ、割り出し寸法のものは試着衣Ⅱとした。

2 縫製方法

これまでと同じく長着として作製する表地は一種の木綿素材と解釈してゆかた地を用いた。着心地もさることながら、写真による比較検討を行う本研究においては、視覚による判断が大きな要素となる。そこで同じ柄を選び、綿100%、長さ12m、並幅(40cm)のクイーンサイズの反物を用いた。

しるしのつけ方・縫い方はこれまでと同様、永野順子著『平面構成学実習Ⅰ』⁴⁾の「大裁女物ひとえ長着」の項を参考にし、剣先位置もLサイズを考慮して、衿肩明き-3cmとし胸の重なりを視野に入れてしるしつけを行った。縫い方も省略することが着崩れに及ぼす要因となる可能性を否定出来ない限り、教科書通りの縫製方法を採用し、2着とも同様に仕立てた。

一方長襦袢は、これも市販されているもので使用されることの多い、モスリンといわれる毛100%、長さ5.75mの広幅(76cm)のものと、絹100%、長さ13.5m、並幅(38cm)の2種類の材料を準備した。

しるしのつけ方・縫い方は寸法を決める時に使用した同じ教科書を用い、「無双袖 裾引き返し 別衿仕立て」の項を参照した。2種類の材料についての縫製の主な相違点は次のよ

第2表 標準寸法と仕立て上がり寸法（試着衣 I と長襦袢）

（単位：cm）

| 名称 | 標準寸法 | 試着衣 I | 長着との比較 | 長襦袢 |
|--|-------------------|--------|----------------|-------|
| 袖丈 | 50. | 50. | 長着 - 0.8 | 49.2 |
| 袖口 | 23. | 23. | | |
| 袖幅 | 32. ~ 33. | △ 37.4 | 長着 - 0.5 | ○36. |
| 袖付け | 23. | 23. | 長着 - 0.5 ~ 1. | 22.5 |
| 袂まるみ | 2. ~ 3. | 2. | | |
| 身丈（裁切り） | 身長と同寸又は + 2. ~ 5. | 164. | | |
| 着丈 | | | 着丈又は - 2. | ☆135. |
| 衿肩明き（上がり） | 9.5 ~ 10. | 10. | 長着 - 0.5 | 9.5 |
| 繰り越し | 1. ~ 3. | 2. | 同寸 | 2. |
| 身八つ口 | 15. | 15. | 同寸 | 15. |
| 衿 | 63. ~ 64. | △ 68.4 | 長着 - 0.5 | 67.9 |
| 肩幅 | 31. | 31. | 同寸 | 31. |
| 後幅 | 29. | 29. | 長着 + 1. ~ + 2. | 31. |
| 前幅 | 23. | 23. | 長着 + 2. ~ + 3. | 26. |
| 衿幅 | 15. | 15. | | |
| 合づま幅 | 13.5 | 13.5 | | |
| 衿下がり（肩山より） | | 23. | | |
| 衿下 | 身丈 × 1/2 | 82. | 身長 × 1/2 | 80.5 |
| 衿幅 | 5.5 | 5.5 | 規定寸法（5.） | 5. |
| 下衿幅 | | | | ※ 7.5 |
| [備考] ・衿寸法は身長により決定。よって、袖幅寸法も変化させた。（△印） ・長襦袢の着丈は身長により決定する割り出し寸法と同寸とした。（☆印） ・下衿幅は使用した布幅の関係により7.5cmに規定した。（※印） ・長襦袢の袖幅は布幅の関係により36cmとした。（○印） | | | | |

うである。布幅と長さの関係によりウール地の場合は背縫を空縫いとし、袖口はわを利用し、下衿丈は半幅1mとした。一方絹地については背縫は二度縫いをして、袖口も1cmで縫い合わせた。下衿丈については布丈が十分に確保出来たため、着丈-10cmに決めた。下衿上部の形に違いはあるものの、出来上がりの面積は全く同じである。

3 着装方法

これまでの実験を確認する意味と、今回の着崩れとの比較をするために着装する肌襦袢と

第3表 割り出し法と仕立て上がり寸法 (試着衣Ⅱと長襦袢)

(単位: cm)

| 名 称 | 割り出し法 | 試着衣Ⅱ | 長着との比較 | 長襦袢 |
|---|----------------------|-------|-----------|-------|
| 袖丈 | 身長×1/3 | ◎ 50. | 長着-0.8 | 49.2 |
| 袖口 | 掌囲×1/2+10.~12. | ◎ 23. | | |
| 袖幅 | 衿×1/2+1. 内外 | 35.2 | 長着-0.5 | 34.7 |
| 袖付け | 腕付根囲×1/2+2.~4. | ◎ 23. | 長着-0.5~1. | 22.5 |
| 袂まるみ | | ◎ 2. | | |
| 身丈(裁切り) | 身長+3. | 164. | | |
| 着丈 | *身長×84/100 | | 着丈又は-2. | 135. |
| 衿肩明き(上がり) | 首囲×1/4 | ◎ 10. | 長着-0.5 | 9.5 |
| 繰り越し | (ニ-ホ×2)×1/3 | ◎ 2. | 同寸 | 2. |
| 身八つ口 | 掌囲×1/2+2.~4. | ◎ 15. | 同寸 | 15. |
| 衿 | *身長×4/10+4. | 68.4 | 長着-0.5 | 67.9 |
| 肩幅 | 衿-袖幅 | 33.2 | 同寸 | 33.2 |
| 後幅 | *腰囲×1.5×1/2×15/35-2. | 31.4 | 長着+1.~+2. | ●33.2 |
| 前幅 | *腰囲×1.5×1/2×12/35+2. | 28.7 | 長着+2.~+3. | ●31.9 |
| 衿幅 | 腰囲×1.5×1/2×8/35 | 17.8 | | |
| 合づま幅 | 衿幅-1.5 | 16.3 | | |
| 衿下がり(肩山より) | ハ-3. | ◎ 23. | | |
| 衿下 | ヌ-18. | ◎ 82. | 身長×1/2 | 80.5 |
| 衿幅 | 規定寸法(5.5) | ◎ 5.5 | 規定寸法(5.) | 5. |
| 下衿幅 | | | | ※7.5 |
| [備考] ・新たに採用した割り出し法。(※印) ・標準寸法を利用した数値。(◎印) ・下衿幅は使用した布幅の関係により7.5cmに規定した。(※印) ・長襦袢の後幅・前幅は肩幅との関係により変化させた。(●印) | | | | |

裾除けのみの長着はこれまでの条件と同じである。

- 1) 上半身の背縫は背中心に合わせる。
- 2) 上前を決める時、左前身頃の衿下を右腰骨にあてる。
- 3) 腰紐の位置は腰骨より2cm上に締める。
- 4) 肩山を肩線より2cm後方に決める。
- 5) 上半身と下半身の衿つけ線を揃えるようにして、頸窩点直下に前面衿の交差位置を決

める。

6) 身頃のゆとりは両脇に寄せる。

以上の6点に留意して着付けた。

今回の主目的は長襦袢を着装することによる変化の観察である。寸法自体は長着を中心とするが、緒言でも触れた様に長襦袢は着装の土台となるものである。そこで、次の事に注意して長襦袢を着装させた。

- 1) 上半身の背縫いは背中心に合わせる。
- 2) 肩山を肩線より2 cm後方に決める。
- 3) 頸窩点直下に前面衿の交差位置を決める。
- 4) 身頃のゆとりは両脇に寄せる。

上記のように着装させた上で、それに添わせる形で長着を着せた。当然のことながら、長着の6条件にも可能な限り添うように留意した。しかし、明らかに無理と判断した場合は、自然な状態で着装させた。

なお、試着衣Ⅰ・試着衣Ⅱとも着装する際の下着との組み合わせによって、以下のように称する。

着装A：肌襦袢+長着

着装B：肌襦袢+ウール地長襦袢+長着

着装C：肌襦袢+絹地長襦袢+長着

4 実験方法

これまで記述した方法によって縫製し、着装させた試着衣のそれぞれについて、着装直後と動作後の着崩れを写真によって観察した。

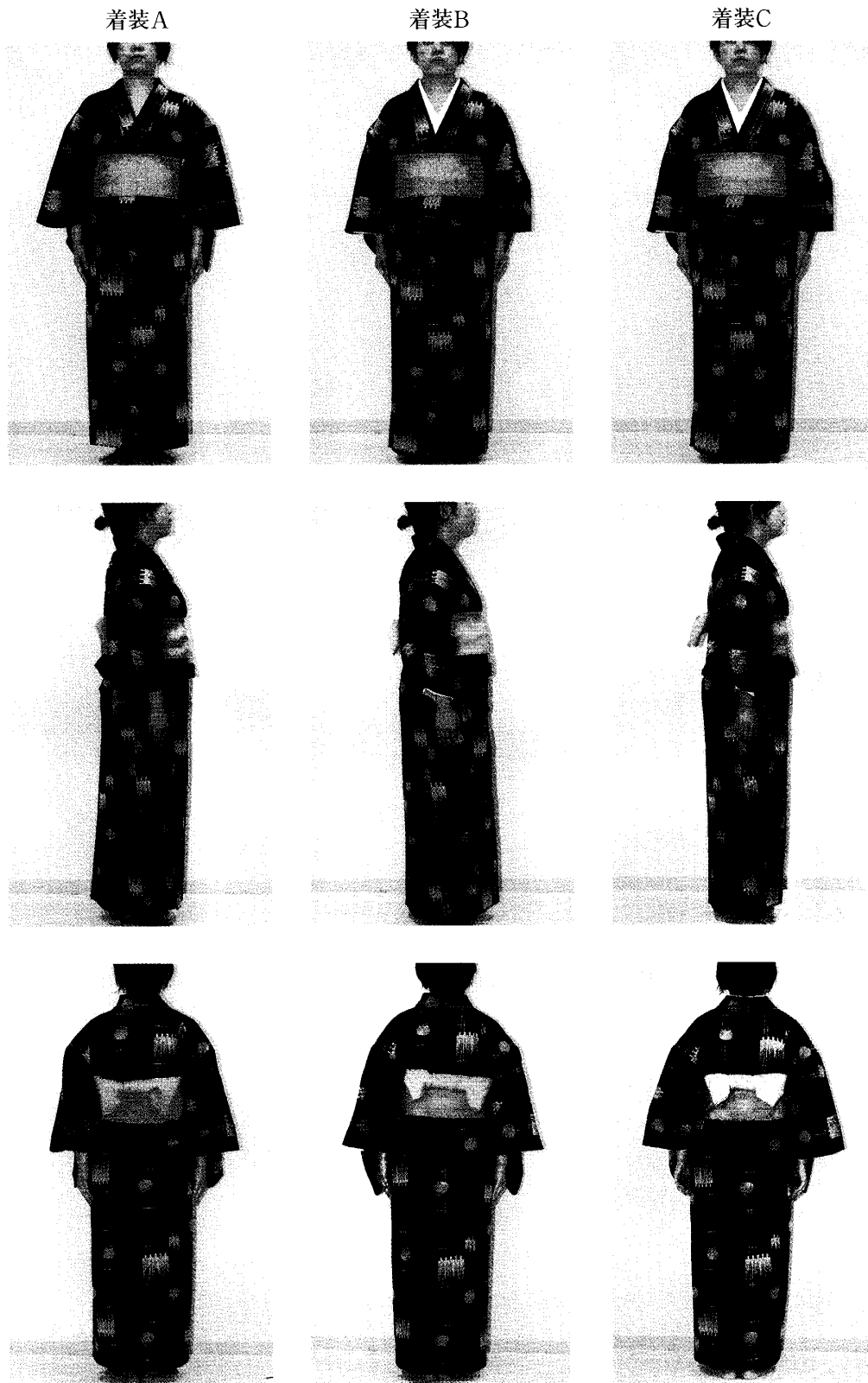
- 1) 着装直後、前面、背面、両側面より写真撮影を行った。
- 2) 2階分の階段昇降を含む5分程度の歩行後、身体の動きが集約されていると考えられるラジオ体操第一を行い、1)と同様に写真撮影を行った。

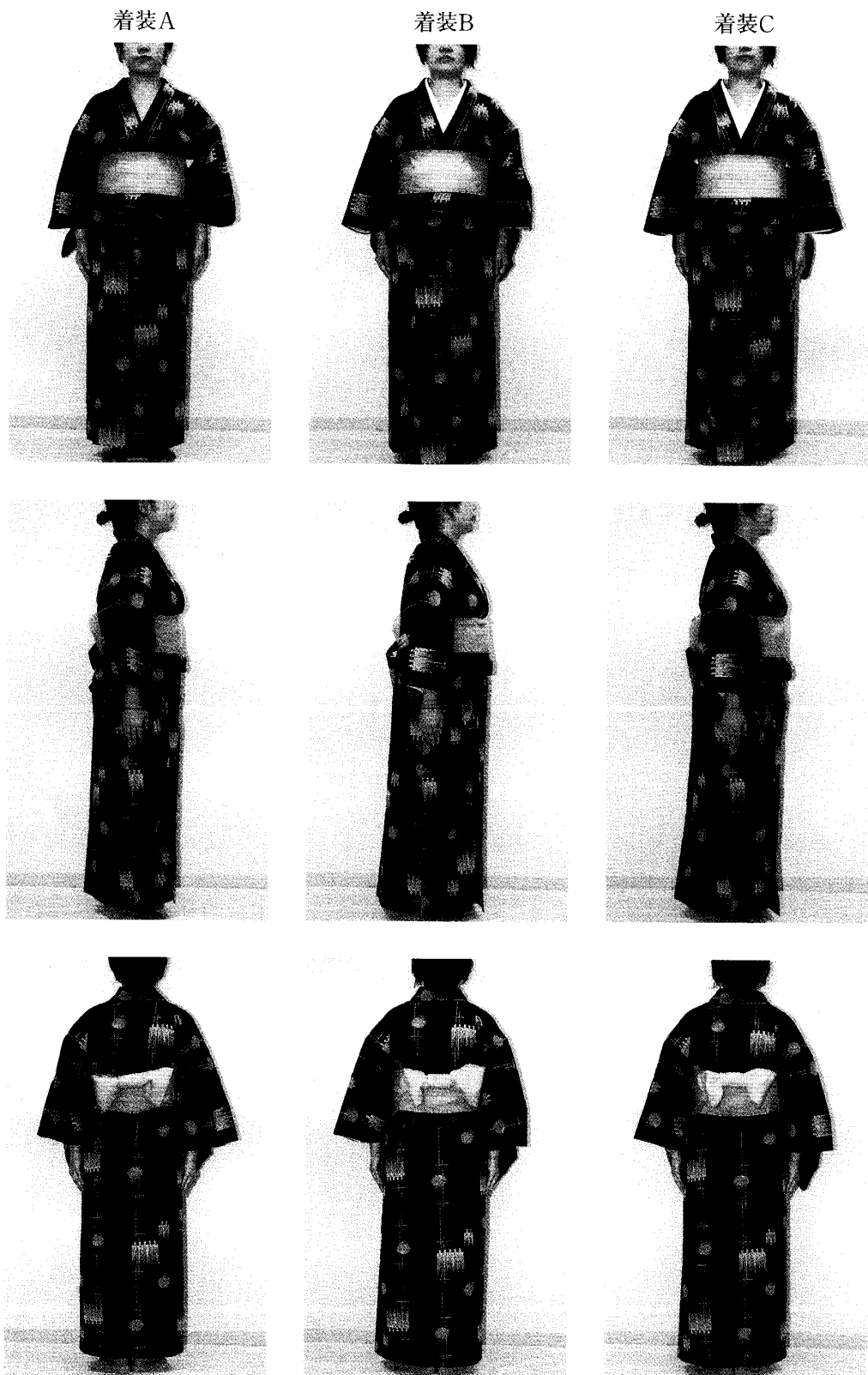
着装直後および動作後の写真は、第2図から第5図である。ただ、紙幅の関係により左側面写真は省略した。右側面の方がさまざまな問題点を持ち、比較検討により適していると判断したためである。

Ⅲ 実験結果および考察

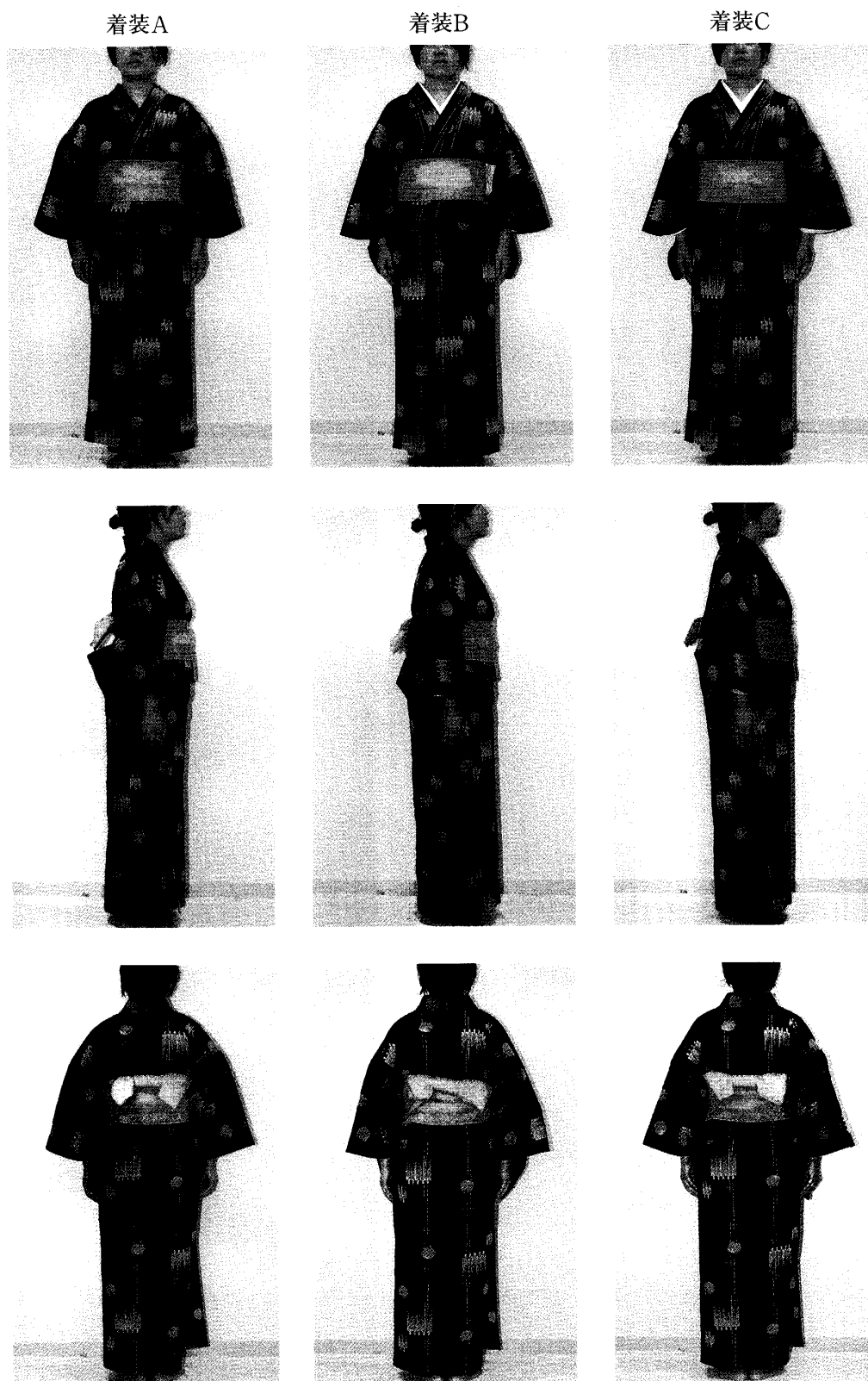
試着衣Ⅰ（着装直後）

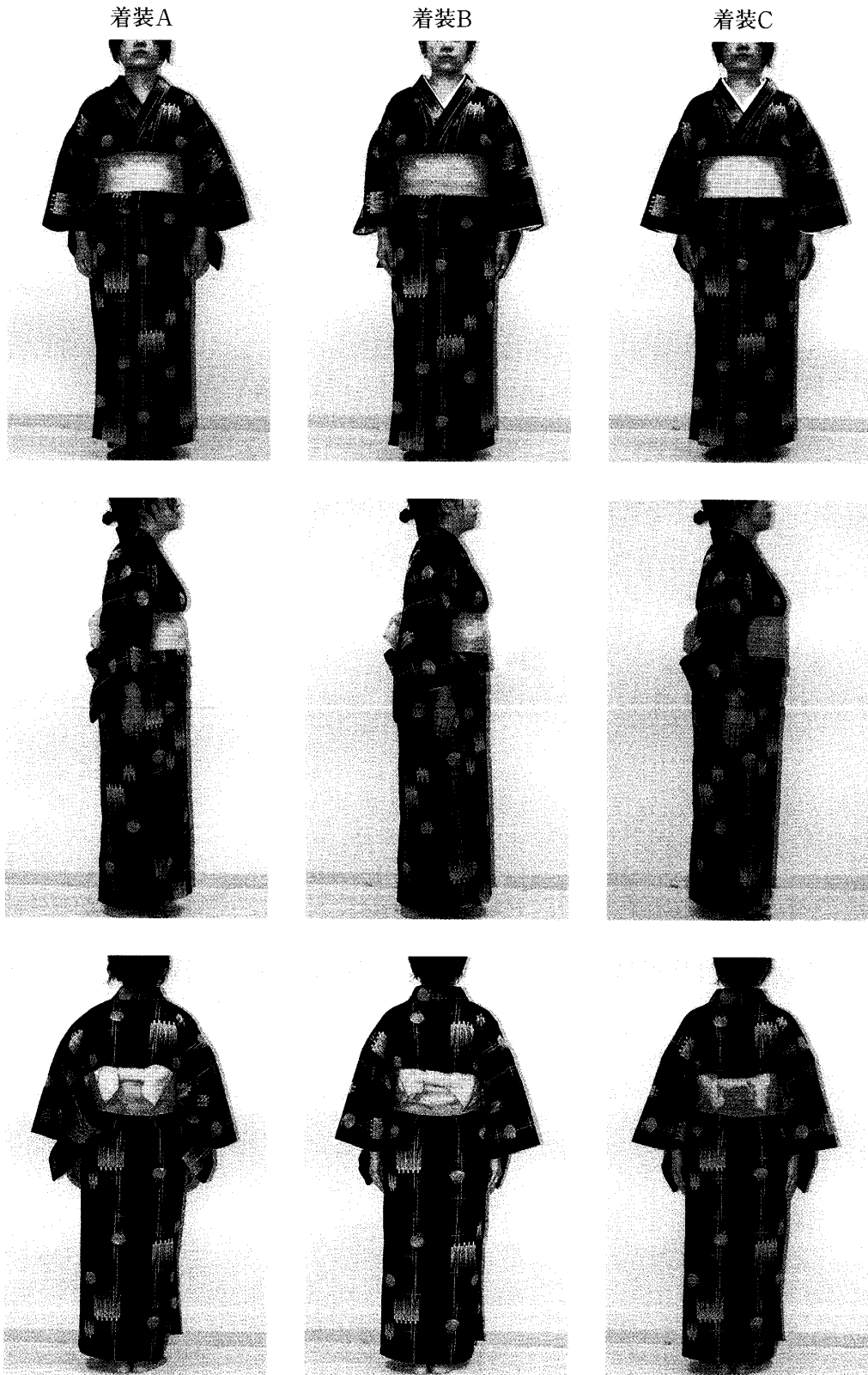
着装Aの場合：下前の衿下位置が前腰幅の半分位までしか届かず、合わせ量が少ないものの、





第3図 試着衣 I (動作後)





第5図 試着衣Ⅱ（動作後）

上前については、基準に近い形を成している。下前の不足は背面図でみると下半身の背中心が左寄りになっていることでも明らかである。上半身については、肩線と衿つけ線の2点を合わせる条件に沿ったことで、衿の交差位置は頸窩点よりかなり下がって鋭角になっている。

着装Bの場合：まず、ウール地長襦袢を4項目に沿わせて着装させると衿の交差位置が、着装Aの長着より下がる。当然交差角度もより鋭角になっている。

この長襦袢の上に、長着を着装させる。長着はこれまでと同じく基本的な着装方法に基づいて着付けたが、長襦袢が一枚加わったことで、長襦袢の衿を出す分外回りを通ることになり、当然の結果として、着装後のスタイルは微妙に変化していることが明らかである。特に顕らかなのが、前面衿の交差位置で着装Aよりさらに下がっている。下半身における背中心のずれが多い。

着装Cの場合：条件Bの場合とほぼ同スタイルを呈しているが、背面から側面にかけての衿肩回りがやや離れ気味であることと、背中心のずれが着装Bよりは微量であっても少ない。

試着衣Ⅱ（着装直後）

着装Aの場合：着装方法に添って無理なく形がととのえられた結果、前報の割り出し法による試着衣の着装状態と同じである。標準寸法の試着衣Ⅰと異なり、下前幅も充分確保でき、余分を折り返している。肩線位置と衿つけ線の上下の一致といった2点の固定もした上で、前面衿の交差位置も高く合わせられて、衿の交差角度が試着衣Ⅰと比較してかなり鈍角になっている。

着装Bの場合：前面衿の形状は、着装Aの場合と同じで、試着衣Ⅰとはかなり相違し交差位置が上になっているのが明らかである。

但し、着装Aと比較する時、長襦袢の前面衿の形そのものが、着装Aにおける長着と異なり、やや首から離れてゆったりとした形となっている。

着装Cの場合：着装Bと相似したスタイルを示しているのは、試着衣Ⅰの場合と同様である。

試着衣Ⅰ（動作後）

着装Aの場合：衿肩回りで、衿が首から離れて広がった形になったことと、袷先が下がって、やや裾広がりになった。

着装Bの場合：上半身については、量的にはさほどではないにしろ、衿の側面は直後より首から離れた形に変化して衿の交差位置がやや下がっている。つまり少しはだけた状態である。それに対して、下半身の崩れは顕らかで上前の袷先が床か

ら5 cm程度上であったのが、床位置にまで下がった。裾の広がりには着装Aより増している。

着装Cの場合：着装Bとほとんど似通ったレベルの変化である。

試着衣Ⅱ（動作後）

着装Aの場合：上半身はほとんど変化が認められない。下半身については、背面から見た衿下裾位置の変化と側面での幅の変化で移動が確認できる。

着装Bの場合：上半身については、衿肩回りが極くわずかに広がった程度の変化であり、側面からみると衣紋がやや抜けている。下半身については、背面からの衿下裾位置、側面での幅の広がり、共に極くわずかな変動である。

着装Cの場合：着装Bとほとんど同程度で変動は微量であるが、側面から前後の広がりを観察すると、着装Cのほうがより少ないことが確認できる。

以上、それぞれの試着衣について着装直後と動作後の変化を写真によって観察した。

まず、標準寸法による試着衣Ⅰについては緒言でも触れたように、前報において適応が困難と判断された経緯がある。しかし今回の被験者に着装を試みた結果、下前の重なりが不充分あるいは前面衿の交差が帯に近い位置になってはいるが、着装可能となった。理由として、今回の被験者はLサイズ以上に属する体格ではあるが、同じくLサイズとして扱った前報の被験者と比較して、腰囲の数値だけに注目しても6 cm減、肩から胸にかけての厚みも明らかに少ないことに因るものと判断できる。数値だけを取りあげると、さほどの相違とは考えられないが、着装させるとその差が歴然と現れている。試着衣Ⅰに対応させて作製した、長襦袢を着用した着装B・Cも同様な結果である。

動作後については、上半身について観察すると着装A・B・Cとも全体的にはだけた状態ではあるが、特記すべき程の着崩れ量は認められない。着装B・Cの方が着装Aとの比較により変化が少ない理由としては衿合わせの時、長襦袢の衿を1 cm程見せることによって、抱き寸法が広くなり少々のゆとりが生じたためと推測できる。それに比べて下半身において、着装AよりB・Cの方が上前裾先がかなり下がり裾広がりといった完全な着崩れ状態に変化したのは、ウール地、絹地いずれもたいした布の厚みではないにしろ、一枚加わったことで、標準寸法による身幅の不足が原因となっていると推測できる。

以上から標準寸法では、着装後動作が伴うと着崩れないように保持するのは無理なことが再確認できた。

次に割り出し法による試着衣Ⅱについては、着装条件により、多少の差異はあってもほぼ満足できる着装スタイルになった。

着装Aと、長襦袢を加えた着装B・Cの着装スタイルの相違点は、主として前面衿の形状である。数量で示すと数センチといったわずかな差といえるが、その原因は長襦袢の衿合わせによるところで、長襦袢の衿の形そのものが相違していることに起因している。今回の着装スタイルが否定されるものではないが、着装B・Cの姿で、もう少し衿の交差位置を頸窩点に近づけるとしたら、長襦袢の寸法の決め方、および長襦袢の寸法に影響する長着の割り出し法、特に抱き幅に関わる部位の決め方を検討する必要性を実感した。

試着衣Ⅱの動作後の着崩れ量に関しては極く少ない程度にとどまっており、上半身・下半身とも特に記すような変化は認められない。強いて言うなら、長襦袢をつけない着装Aにおいて、なかでも衿下裾位置の変化がB・Cよりは若干多い。この要因として、今回採用を試みた長襦袢に因ることが推測できる。肌襦袢は着用しているとはいえ、その上に長襦袢を重ねたよりは、身体に密着して動きの影響が長着にでやすくなる。反対に長襦袢が間に入ったことでいささか緩和されることも想像できる。ただ、今回の実験においては、長襦袢を採用することによる着崩れ量への影響、長襦袢に用いる材料の違いが問題視する程でなかったことなど、想定外の結果となった。とはいえ確証を得たわけではないが、着装スタイルへの関与、長着の材質との抵抗、摩擦といった関連を含めて長襦袢の着崩れへの影響が少なからずあるという感触を得たことも否定できない。

総 括

ウール地・絹地という2種類の素材を用いて作製した長襦袢が着崩れに及ぼす影響を究明したのが本研究である。被験者本人は絹地の長襦袢がすべりが良くて着心地は良いと評価したが、今回の実験では材料による明確な違いは認められない結果となった。

前回よりラジオ体操を取り入れるなど運動量も増やしたが、未だ不足の感を拭いきれない。そのこと以上に、長襦袢の仕立て上がり寸法に危惧の念を持つ結果となった。割り出し法による長着に対応させたにも関わらず、上半身の身幅不足は明らかである。ゆかた以外は夏でも長襦袢を着用して和服姿をととのえるのが通常である。形よく着装するためには、長着と長襦袢を切り離しては考えられないことを再認識した。まして、着装の土台となれば、長着の寸法決定と同じ或はそれ以上に長襦袢の寸法の決め方が重要となる。

長着の下半身における半身の幅の配分という課題を研究しつつ、長着と長襦袢の上半身についても、特に抱き幅を確保するための寸法の割り出し方を縫製方法と共に探してみたい。加えて、2種類の素材の長襦袢に種々な素材の長着をあわせ、着崩れへの影響の有無を検証していきたい。

[付記]

本研究を作製するにあたって、平面構成研究室の小平志乃氏、山口直子氏のご協力を得た。

文 献

- 1) 羽生京子・仲村洋子：和服における着崩れについての考察（第2報）和洋女子大学紀要 44 家政系編 11—26（2004）
- 2) 横山千年枝：和服寸法百科 ふたば書房 22-55（1995）
- 3) 永野順子：平面構成学実習Ⅱ 衣生活研究会 90-138（1984）
- 4) 永野順子：平面構成学実習Ⅰ 衣生活研究会 46-85（1983）